

BASARE

九重からここのえへ

KOKONOE

FreePaper

2014



創刊号

《特集》

あんしのあれがうめえ!

- ◇おはぎ (永楽 美保子さん)
- ◇ゆでもち (渡辺 和子さん)
- ◇梅干し (亀井 サヨ子さん)

《軽トラ×女子》

佐藤 典子さん・高橋 奈々江さん
佐藤 咲子さん・佐藤 真由さん



01

こあいさつ

九重からこのえへ

毎日、とてもしあわせそうに過ごしている人たちがいます。
そんな人たちに共通すること。

それは、あれが足りない、これが足りないでなく、
足りているもの、今あるいいものをいくつもあげられ、
自分が、いかに恵まれているかに気づいていることです。

私たちが住んでいるこの町には、そんなしあわせのモト、
いいもの、いいひとがたくさんです。

BASSAREで取り上げるのは、
すました、よそいきの「九重」ではなく、
やさしい、ふだん着の「このえ」です。

これをきっかけに、みなさんのまわりの、
しあわせのモトに気づいてもらえるとうれしいです。

「九重からこのえへ」は、

町の人から町の人への意味もあります。

たくさん（BASSARE）の「しあわせのおすそわけ」、
ご用意しました。

どうぞ、お楽しみください。





おくの
奥野

美保ちゃんのおはぎ

九重の
いいところ

落ち着く場所やわ。

割烹着に、手ぬぐい姿がなんとも素敵
な美保子さん。

九重産の大豆を使い上品な甘さに仕上げたこしあん、自宅で作来たもち米で作る美保子さんのおはぎは、たくさんのこだわりの中で丁寧に作られます。たとえば、もち米の中に白米を一割入れたり、もち米の蒸しあがりとおんこの出来上がる時間が同じになるよう調整したり。

出来たおはぎは、おてしよ（小皿）に移し、まずは仏様へ。

「昔は本当に大変やったんよ、今のよう
に便利なものがないけん、毎日毎日体ひ
とつで働くばかり! やけんね、ごちそ
うを作る暇とかなかったんよ。栄養面も



永楽 美保子さん

考えもせんかった。芋やらあるもんを腹
いっぱい食べられればそれで良かったんよ。
やけんね、今の食事はありがたい、幸せつ
ち、しんけん思うね」

限られた生活の中でそれが当たり前だ
と思いききてきた時代があった。

だからこそ、食に対する感謝の気持ち
が深いです。

そんな美保子さんも九重に嫁いで数十
年。美保子さんにとって九重は落ち着く
場所になっていました。

「よそに出かけても、早よ九重に帰り
てくち思うもん。大好きやわ、九重が」



くぐりいし
潜石

和子さんのゆでもち

九重のいいところ！
地域がまとまっているから
暮らしやすく。



渡辺 和子さん

取材が段取り良く出来るようにと、準備万端で私たちを出迎えてくれた和子さん。

「食べることをするのが一番楽しいし好きやね〜」と話してくれる和子さんに今回作っていただいたのは、ゆでもち。上品な甘さに仕上げた手作りのつぶあんに薄力粉、塩、砂糖、お水だけのシンプルな材料で作ります。余計なものが入っておらず、粉やあんこなど素材のかおりをしっかり感じられるから子どものおやつにもおすすめです。

手早くまんじゅうを丸め、平らにしながら「美味しくてできるかな〜」「あの人に持っていこうかな〜」そんな事

を考えながら作るという和子さん。近所の方へおすそわけ——
その心が若い世代にも自然と受け継がれていきます。

「今はモノが豊富にあるから、買えばすぐなんでも手に入るけど、このゆでもちは簡単だからぜひ若い方たちに作り続けてほしいね」

素材なモノに対して人は安心して心をひらく。

だから、シンプルな材料で心もおなかも満たされる和子さんのゆでもちは、みんなを笑顔にさせてくれる食べ物なのです。



きんざん
金山

サヨちゃんの梅干し

九重の
いいところ

住みやしうし、
いいところじょう。

「おたしや、梅干しはいっつそん食べんより、だつて、すいもん」

その言葉で取材の現場は笑いに包まれ、私たちとサヨ子さんとの距離は一気に縮まりました。戸次^{へつき}の知り合いからトラック一台分のシソをもらうようになったのは今から四〜五年前。せっかくだからと、植えている梅の木からたくさんの実を採り近所のお友達四人と梅干しを作るようになりました。

今年は何んと、一〇〇kgの梅を漬けたというからびつくり。

「梅を三日三晩より干して、シソをよく揉んで、出てきた赤い汁を梅にかけち、梅をよく揉むんで。そしたら、



亀井 サヨ子さん

いい梅干しがでける」

今のように便利なものいいけど手間暇かけて作ったものはやっぱり格別、とサヨ子さんは話してくれました。

梅仕事はとにかく大変、「今年こそは、やむく（やめよう）ち思うんやけど、梅干しをあげた人から、『おいしかったより、ありがとう』つち言われるとよしまた作ろうち思うんよ。おたしや、人にあげるんが好きで作りよるんよ」

そこに感じる匂い、色、そしてサヨ子さんの言葉・・・すべてに、田舎のステキがたくさん詰まった空間でした。





私の名前は
「あさみ2号」よ♪



軽トラ女子

Pick up Truck Girls

Q. 軽トラのいいところは？

軽トラ×女子
佐藤典子さん

アクティブさが魅力の軽トラは、乗る人によっては、十分カッコいいものになります。「いつも軽トラを爆走させてます（笑）」と話す佐藤典子さんは、その資格十分。つなぎに長靴、首にはタオルを巻いた姿も実にカッコいい。「生まれ育った家なので、自然に」と実家の畜産業を継いだ典子さん、ダンナさんと2人3脚で、仕事に子育てに、オフはないけど、充実感はたくさん。「これからの農業のあり方を真剣に考え、いろんな知識を蓄えながら仕事をしています、努力は裏切りませんから！」典子さんのことばには、若い世代の可能性が力強く詰まっています。



A. 小回りがきくところですね。

生まれ育った町。移り住んできた町。
九重町の農業の現場で働く女子たちのそれぞれの言葉。

軽トラ×女子
高橋奈々江さん

泥の付いた田植え足袋がこんなにおしゃれに見えるなんて！
ダンナさんと無農薬米をつくる高橋奈々江さんは、元保育士。別府から嫁いで4か月、九重の良いところは、「ありすぎて迷うけど、自然がいっぱいで人があたたか。住みやすいです」。驚いたのがおコメのおいしさ。「だから、おコメを炊くのが毎日楽しみです（笑）」。
心から農業、そして農村生活を楽しんでいる様子の奈々江さん。「まだまだ見習ですが、農業は自然の中で自分たちの思いをいっぱい込められる魅力のある仕事です！」
ますます、高橋さんちのおコメはおいしくなりそうです。



A. 農機具をたくさん積める場所ですね。



田んぼではご主人とお友達が、草取りの真っ最中



バードウォッチング用長靴

軽トラ×女子

佐藤 咲子さん

むむむ、デキル！
 そのいでたちを見て、思わずつぶやいてしまいました。
 特に目を引くのが、長靴。
 友達からのプレゼントだそうです。
 2年前から実家の精米所を本格的に継いだ佐藤咲子さん。
 農繁期には、がっつりと農作業もします。
 おとものマイ軽トラ（ホ口付き）は、日常でも大活躍、近所の買い物はもちろん、最長は熊本まで。
 旅行も大好きです。これまで行った海外は13か国。
 フワッとやわらかい印象の中に、ぶれないセンスを持った咲子さん。
 「新しいことに取り組んでいきたい！」と笑顔で話してくれました。



A. 低燃費！

軽トラはお父さん達だけの乗り物ではなかったんです。チャーミングで、頼もしい女子たちを紹介します。

A. 力強いところと、あの狭さも好きです(笑)



軽トラ×女子

佐藤 真由さん



飯田高原の隠れ家的場所に突如出現する牛舎5棟。そこで、約60頭の牛を飼っているのが、佐藤真由さん。
 あたりにはスピーカー代わりのギターアンプから音楽が流れています。
 結婚を機に、畜産をはじめて3年。今では牛のことを考える時間が増え、「私も牛飼いになったな〜」と実感する真由さん、つなぎ姿もすっかりさまになりました。
 作業の傍ら、お子さんを保育園に送迎するなど育児や家事にも大忙しの日々。
 1日でいちばん好きな時間は、「1頭1頭に餌をあげる時」。
 そう答えてくれた真由さんの目は、しっかりと牛飼いの目になっていました。



「BASARE」を一緒に作りませんか？

一緒に作る人を募集しています。

第2号は、2015年2月発行予定です。

BASARE

九重からこのえへ

発行日：2014年10月15日

発行：九重町公民館

本書は、無料で配布しております。

本書へのお問い合わせは下記までお送りください。

九重文化センター

TEL：0973-76-3888 Mail：bunka@town.kokonoe.lg.jp

本書の一部または全部を無断で複写、複製すること禁じます。

Printed in Japan © Kokonoe Town.



九重町は、落ち着く場所やね。
よそに出かけても、早よ九重に帰りてうち思うもん。
大好きやわ、九重が。

KOKONOE
FreePaper
2014
01